

身の回りの文字を見つめ直してみよう

看板文字の息づかい

二松學舎大学 非常勤講師 内田 征志（うちだ せいし）

はじめに

現代では、ワープロソフト等の普及により、文書作成時には、さまざまな書体（※①）や文字修飾（※②）を用いて表現することが容易になった。しかし、自由度が高すぎて、かえって内容や意図が伝わりにくい表現になってしまいうこともあり、その選択を適切にするための指導も必要となっている。

平成二十年三月告示の新しい中学校学習指導要領「国語」でも、第三学年で「身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと」が新たに加えられた。生徒一人ひとりが、自ら「文字」に興味・関心をもち、理解を深めるための指導は、ますます重要になってきているといえよう。

指導の流れ

①文字にはいろいろな書体があることに気づく

初めに、光村図書「中学書写 二・三年」教科書の見返し（2ページ）「文字は何に書かれてきたのか」を見ながら、同じ「馬」という文字でもさまざまな書体があることに気づかせる。

この教材は、書かれた素材についての解説が中心となっているが、本実践では「馬」の書体の違いに着目させた。もちろん、中学校の書写では学習する内容で



さまざまな「馬」の書体

はないが、後に集めた文字を比較・分類するときの目安として軽く触れるようにした。

各書体の特徴がより分かりやすいように、「甲骨文字」「金文」「篆書」「隷書」「草



商店街にはさまざまな書体の文字があふれている

②身の回りにある文字を集める

校内、家庭内、街中などで見かけたさまざまな文字をデジタルカメラで撮影する。その際、文字のもつ表情や効果について生徒に興味や関心をより高くもたせるよう、今回は、「毛筆風書体」（それに近い活字書体も含める）というテーマを決めて文字収集をさせた。こうした制約を設けることによって、より意識的に文字に向き合うことができる。

また、デジタルカメラを使わず、紙に鉛筆でメモするという方法も考えられる。今回は、「骨書き（※③）」「籠字（※④）」という方法も合わせて取り入れた。この方法は記録に時間がかかるが、きちんと一字一字の字形を確認することができ、生徒たちは、お互いに書き取った字形を比べながら、楽しんで取り組んでいた。

③集めた文字を分類する

班ごとに、収集してきた文字の書体分類を行う。基本的には①で学習した書体に基づいて分類するが、仮名文字やデザイン書体なども混じっているため、「その他」「仮名」などのカテゴリーも必要に応じて設ける。

ここでは厳密な分類は目的ではないので、似ている書体でのグループ分けと考へ、あえて生徒の判断に異論を差し挟むことはしない。

④それぞれの書体がどんな意図や効果があるか考える

まとめ方としては、光村図書「中学書写 二・三年」教科書の「四 生活にかそう」で扱われている「修学旅行新聞」（P.29）などを参考に、新聞形式、パネル発表など考えられよう。今回は、時間の都合上、班ごとに自由な方法で発表をする形式をとった。

本実践の目的は、書体の分類を知ることではなく、多様な書体があり、それぞれの書体が使われている理由を理解することにある。書体ごとの特徴や与える印象について調べ、それを今後の文書作成などで生かせるような指導をしたい。

指導の実際

それぞれの班で、集めた文字と、それについての感想を発表させた。そのうち、特徴的な例を二例紹介する。(生徒作品のデジタルカメラ画像は、商標権に抵触するおそれがあるため、一部改変して掲載)

A班 同じ文字で異なる書体を集める

「鮮魚」…流れるような書き方、わざと太さを変えた書き方、勢いのよいはねなどで、魚の生きの良さを表している。

「珈琲」…漢字で表し、書き文字にする、特別な感じがする。

「そば」…仮名にはいろいろな書体があり、それぞれのそばの太さや味が表れているようだ。

同じものを売っている店でも、看板の書体や文字の色が違うだけで印象が違ってくる。

学校の表札を魚屋さんや珈琲店と同じ書体で書いたら変だと思ふ。それぞれの商店や会社などは、そこにふさわしい書体を使っているんだなと思った。

おわりに

本実践は単純に言えば、校内、家庭内、街の中など日常生活の中で普段見かけている看板文字を集めてみるという、ただそれだけのことであったが、「文字」に対しての生徒の意識は随分変わってきたように思える。身の回りの多様な文字に関心をもたせることは、書写指導の原点の一つであることは間違いないだろう。「文字と遊ぶ」という感覚で、一文字

この班では、同じ商品の書体による表し方の違いに目をつけている。生徒たちは、文字を集めながら、書体ごとに違う表情を的確にとらえ、さらに、ゴシック体や明朝体などの活字での表現との違いに気づくこともできていた。

B班 隷書に注目し、鉛筆によるメモをもとに特徴を考える

「隷書」を選んだのは、他の文字と違ってきれいで整った印象を受けたから。探しているうちに、結構いろいろなどころで使われていることに気がついた。

また、同じ隷書でも、太さや形が違っているものがあることもわかった。

隷書は、楷書や行書と比べて、なにか正式でものものしいイメージがある。また、はらいの部分が独特で、きりつとしたスピードが感じられる。格式を重んじるお店や商品などでよく使われているようだ。

B班では、看板等に使用されている隷書を中心に集めた。この実践の冒頭で、各書体についての大まかな解説はしたが、

隷書の特徴について細かな説明はしていなかった。そのため、収集した文字の中にはポップ文字などのデザイン活字も含まれていたが、あえて区別させる指導は避けた。

生徒はこれらの文字を模写するなかで、帰納的に隷書の特徴を探り出し、波磔(はたぐ)※⑤を強調した気品や、美しい姿を感じ取っていたようだ。

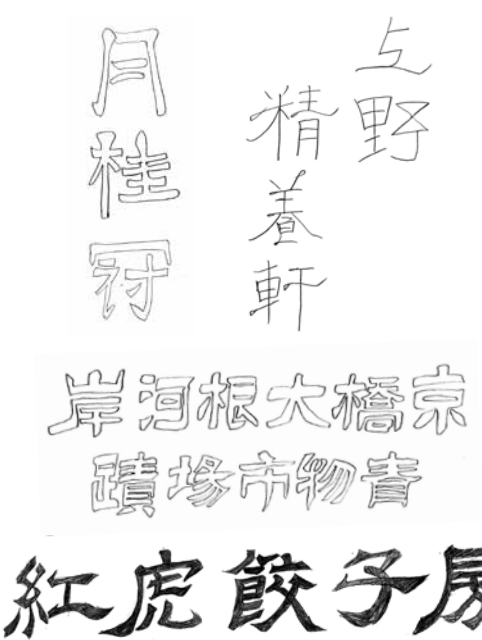
ここで取り上げた両班に限らず、生徒たちは実にさまざまな書体の文字を集めてきた。それを使って、自分たちが好きな書体、使ってみたい書体など考えさせることで、文字の形や効果に対する興味が高まってきた。生徒の中から自発的に、これらの書体を生かした作品作りをしたという声も出てきたことで、本実践の目的は、まず達成されたといえよう。

今回は時間の都合でできなかったが、ここで学んだ書体による効果を応用して、本の帯やポスター作りなど、人目を引きつける必要のある表現活動に結び付けられれば、さらに文字に対する意識は高まってくるであろう。

A班の集めた文字群



B班の集めた文字群



※①「書体」

楷書・行書・草書など、特定の様式で統一された字形。ワープロソフトなどで用いられる「フォント」とほぼ同じ意味。

※②「文字修飾」

太字や斜体、影付き、白抜き、縁取りなど、その文字を目立たせたり区別したりするために用いられる手法。

※③「骨書き」

画の中心を線で示す方法。

※④「籠字」

文字の輪郭を写し取ること。

※⑤「波磔」

横画の終筆に見られる、隷書独特の三角状の払い。